

平成 25 年度理事会, 学術評議員会ならびに社員総会における報告承認決定事項

第 56 回一般社団法人日本糖尿病学会年次学術集会は, 荒木栄一会長主宰のもとに平成 25 年 5 月 16, 17, 18 日の 3 日間, 熊本市市民会館, ホテル日航熊本, 熊本市現代美術館ほかにおいて開催された。これに先立ち 5 月 15 日に理事会がホテル日航熊本, 学術評議員会が熊本市市民会館で開催され, また定時社員総会は 5 月 16 日に熊本市市民会館で開催された。

1. 平成 24 年度事業報告および庶務報告

●事業報告

1. 第 55 回年次学術集会

会 長 渥美義仁 (済生会中央病院)

会 期 平成 24 年 5 月 17 日 (木)~5 月 19 日
(土)

会 場 パシフィコ横浜, ほか

参加者 13,573 名

・会長講演 糖尿病診療の変革をめざして~ベッド
サイドから発想してかたちへ

・特別講演 The role of beta cell mass in type 2
diabetes

・特別講演 非侵襲的膵β細胞イメージングの試み
と現状

・特別講演 回復する力, 新しい力

・理事長声明

・学会賞受賞講演

ハーグドーン賞 小児期発症 1 型糖尿病の予後に
関する国際共同疫学研究

リリー賞 ①インスリン分泌における cAMP センサー
Epac2A の機能とその役割の
解明

②糖尿病状態における膵β細胞機能障
害の分子機構の解析

・Cutting-edge Lecture

Dynamic Changes of Adipose Tissue Immune
Responses in Obesity 他 2 題

・シンポジウム

2 型糖尿病 インスリン分泌 再生医療による糖
尿病治療 災害時の糖尿病診療 インクレチンの
解明 腎症の成因 糖尿病と癌 糖尿病医療学
小児糖尿病 他 10 題

・教育講演

NAFLD 網膜症 脳梗塞予防 神経ネットワー
ク 糖尿病協会 心不全 PAD 足潰瘍 劇症 1
型 他 4 題

・From Debate to Consensus

CSII 導入フロンティア 食事の糖質量 交換

表とカーボカウント タンパク制限食

他 3 題

・CDE オープンカンファレンス

CSII で良いコントロールを得るために フット
ケアの実践

・一般演題 2,284 題

2. 第 47 回「糖尿病学の進歩」

世話人 住田安弘(三重大学保健管理センター)

会 期 平成 25 年 2 月 15 日 (金)・16 日 (土)

会 場 四日市市文化会館, 四日市都ホテル(四
日市市), ほか

参加者 3,113 名

1) 第 1 日目

A 会場

・レクチャー: 専門医単位更新のための指定講演
(専門医, 非専門医, 上級 CDE)

1. 糖尿病の概念・定義 他 10 題

B 会場

・レクチャー: 療養指導に必要な知識 (コメディ
カルスタッフ)

1. 糖尿病療養指導士 (CDE) の現状と課題

他 6 題

・シンポジウム: 療養指導外来に期待する !!

1. 外来におけるチーム医療の新たな取り組み—糖
尿病透析予防指導管理料— 他 3 題

C 会場

・レクチャー: 臨床医にも分かる基礎研究 (専門
医, 非専門医, 若手医師)

1. 多能性幹細胞から膵β細胞への分化誘導

他 7 題

・レクチャー: 糖尿病診療に必要な知識 (専門医,
非専門医, 若手医師)

1. 糖尿病合併症としての骨粗鬆症 他 2 題

D 会場

・シンポジウム: 糖尿病性神経障害のすべて

1. 糖尿病性神経障害の症候学: ポリニューロパ
チーの重症度をどう診るか 他 4 題

- ・シンポジウム：糖尿病性腎症の進歩—最近の進歩
- 1. 糖尿病性腎症の成因—酸化ストレスを中心に—
他 5 題
- E 会場
- ・レクチャー：糖尿病診療に必要な知識（非専門医、
上級 CDE）
- 1. 糖尿病患者の大血管症 Update 他 10 題
- 2) 第 2 日目
- A 会場
- ・レクチャー：専門医単位更新のための指定講演
（専門医、非専門医、上級 CDE）
- 1. 血糖コントロール指標 他 10 題
- B 会場
- ・レクチャー：療養指導に必要な知識（コメディカ
ルスタッフ）
- 1. 糖尿病療養指導に必要な禁煙支援の知識
他 4 題
- ・シンポジウム：エンパワーメントに基づく患者
支援
- 1. 医師の立場から 他 4 題
- ・総合討論
- D 会場
- ・シンポジウム：日本人 2 型糖尿病の特徴
- 1. インスリン分泌 他 3 題
- ・シンポジウム：新しい 2 型糖尿病治療戦略～病
態を生かした治療選択の多様性
- 1. DPP-4 阻害薬：有用性と課題 他 5 題
- ・総合討論：厳格な血糖管理をめざして
- E 会場
- ・レクチャー：若手医師のための糖尿病講座（非
専門医、上級 CDE）
- 1. 2 型糖尿病はなぜ増加するか？ 他 6 題
- F 会場
- ・レクチャー：糖尿病診療に必要な知識（専門医、
非専門医、若手医師）
- 1. 2 型糖尿病の予知 他 7 題
- ・レクチャー：実地医家のための時間（専門医、
非専門医、若手医師）
- 1. 当院における糖尿病診療の実際と青森糖尿病
療養指導研究会 他 2 題
- 3. 地方会活動
- 1) 第 46 回日本糖尿病学会北海道地方会
会 期 平成 24 年 11 月 11 日（日）
会 場 旭川グランドホテル
会 長 羽田勝計（旭川医科大学内科学講座病
態代謝内科学分野）
- 参加者 516 名
- 2) 第 50 回日本糖尿病学会東北地方会
会 期 平成 24 年 11 月 10 日（土）
会 場 フォレスト仙台
会 長 佐藤 讓（岩手医科大学糖尿病代謝内
科）
参加者 796 名
- 3) 第 50 回日本糖尿病学会関東甲信越地方会
会 期 平成 25 年 1 月 26 日（土）
会 場 パシフィコ横浜
会 長 平野 勉（昭和大学医学部内科学講座
糖尿病・代謝・内分泌内科）
参加者 2,142 名（医師 1,317 名、コメディカル
825 名）
- 4) ①第 85 回日本糖尿病学会中部地方会
会 期 平成 24 年 4 月 7 日（土）
会 場 三重県総合文化センター
会 長 田中剛史（三重中央医療センター内分
泌代謝診療部）
参加者 572 名
- ②第 86 回日本糖尿病学会中部地方会
会 期 平成 24 年 10 月 13 日（土）
会 場 名古屋国際会議場
会 長 中村二郎（愛知医科大学医学部内科学
講座糖尿病内科）
参加者 735 名
- 5) 第 49 回日本糖尿病学会近畿地方会
会 期 平成 24 年 11 月 17 日（土）
会 場 国立京都国際会館
会 長 石井 均（天理よろづ相談所病院内分
泌内科）
参加者 2,088 名
- 6) 第 50 回日本糖尿病学会中国・四国地方会
会 期 平成 24 年 11 月 16・17 日（金・土）
会 場 くにびきメッセ
会 長 杉本利嗣（島根大学医学部内科学講座
内科学第一）
参加者 903 名
- 7) 第 50 回日本糖尿病学会九州地方会
会 期 平成 24 年 10 月 19・20 日（金・土）
会 場 ホテルマリターレ創世
会 長 赤澤昭一（新古賀病院副院長）
参加者 2,104 名
- 4. 支部長会活動
支部長間で意見交換する場を設けることにより支部
活動がより円滑に進み、また財政面も含めて本部が支
援できる体制も構築できるとの観点から、支部長会を

年1~2回定期開催することとした。第1回定例支部長
会が平成25年4月14日に開催された。

間の行事が一斉に行われた。テーマは「チーム医療で
糖尿病透析予防」。

5. 分科会活動

- 1) 第27回日本糖尿病合併症学会
会期 平成24年11月2・3日(金・土)
会場 アクロス福岡
会長 梅田文夫(医療法人森和会行橋中央病
院院長)
参加者 約1,500名

6. 出版事業

- ①会誌「糖尿病」第55巻4号, 第55回年次学術集
会抄録号~第56巻3号まで, 13回発行
会誌 Diabetology International
- ②糖尿病患者向け指導書
- 1) 糖尿病食事療法のための食品交換表 第6版
150,000部発行
 - 2) 糖尿病治療の手びき 改訂第55版 増刷なし
 - 3) 糖尿病性腎症の食品交換表 第2版
5,000部発行
 - 4) 糖尿病食事療法のための食品交換表CD-ROM版
(ver.4) 増刷なし
 - 5) 糖尿病性腎症の食品交換表CD-ROM版(ver.2)
付き 増刷なし
 - 6) Food Exchange List 増刷なし
 - 7) 糖尿病食事療法のための食品交換表 活用編
5,000部発行
- ③医師, コ・メディカル向け指導書
- 1) こどもの糖尿病・サマーキャンプの手引き 第
3版 増刷なし
 - 2) 糖尿病食事療法指導のてびき 第2版 1,000部
 - 3) 糖尿病療養指導の手びき 改訂第4版
3,000部発行
 - 4) 糖尿病治療ガイド2012—2013 140,000部発行
 - 5) 糖尿病学用語集 第3版 増刷なし
 - 6) 糖尿病遺伝子診断ガイド 第2版 増刷なし
 - 7) 糖尿病専門医研修ガイドブック 改訂第5版
6,000部発行
 - 8) 小児・思春期糖尿病管理の手びき 改訂第3版
増刷なし
 - 9) 糖尿病学の進歩 46集 1,200部発行
 - 10) 糖尿病の療養指導 2012 1,200部発行
 - 11) 科学的根拠に基づく糖尿病診療ガイドライン
2010(改訂第3版) 増刷なし

7. 糖尿病週間

平成24年11月12日~18日, 第48回全国糖尿病週

8. 国際糖尿病連合会議

- ・IDF-WPR Congress (2012.11.24-27, 京都) の開
催
- ・IDF-WPR Council Meeting (2012.11.24, 京都) へ
の出席

9. 普及・啓発・後援事業

- ①第48回全国糖尿病週間の共催
期間 平成24年11月12日~18日
- ②日本糖尿病協会への協力
「さかえ」および「つぼみ」発行の企画等
- ③世界糖尿病デーへの参加
第6回「世界糖尿病デー」関連イベントの開催
平成24年11月14日
- ④糖尿病と癌に関する合同委員会
- ⑤糖尿病学会と肝臓学会との合同委員会
- ⑥より良い特定検診・保健指導のためのスキルア
ップ講座(開催地:神戸市)
平成24年6月17日・平成24年6月23日
- ⑦世界口腔保健学術大会記念「第18回口腔保健シ
ンポジウム」 平成24年7月7日
- ⑧糖尿病予防キャンペーン 東日本地区講演会
平成24年10月8日
- ⑨「糖尿病の検出及び発症予防」事業 糖尿病予防
キャンペーン
平成24年10月8日・平成24年11月10日
- ⑩平成24年度「糖尿病シンポジウム」
平成24年10月14日・11月24日
- ⑪東京新聞健康講座「糖尿病を知ろう」
平成24年10月21日
- ⑫第24回日本糖尿病性腎症研究会
平成24年12月1日・12月2日
- ⑬平成24年度「食育健康サミット」
平成24年12月6日
- ⑭関西疾患メタボロミクスシンポジウム
平成24年12月18日
- ⑮第6回JSDEIセミナー「糖尿病—栄養と口腔保健
の推進セミナー」 平成25年2月3日
- ⑯食事療法に関するシンポジウム
平成25年3月17日

●庶務報告

1. 総会

平成24年5月17日, パシフィコ横浜にて第55回定
時社員総会を開催した。平成23年度事業報告, 庶務報

告、収支決算報告が承認され、また平成25年度事業計画および予算が承認された。第58回会長に谷澤幸生学術評議員が選出・承認された。

2. 学術評議員会

平成24年5月16日に開催された。

3. 理事会

定例理事会は平成24年5月16日、12月9日、臨時理事会は平成24年5月18日、平成25年2月14日の合計4回開催された。

●会員状況報告（平成25年3月31日現在）

1. 役員等

1) 役員

理 事 18名（23年度末 18名）

監 事 2名（23年度末 2名）

2) 学術評議員 672名（23年度末 673名、退会1名）

2. 会員等

1) 名誉会員 31名（23年度末 30名、追加2名、物故者1名）

2) 正会員

24年3月末日会員数 16,749名

24年度新入会 621名

名誉会員へ -2名

退会 -436名 退会内訳
希望退会 270名
会費未納による資格喪失 130名
物故者 36名

正会員 現在数 16,932名（183名増）

3) 賛助会員

24年3月末日会員数 45名

退会 1名

賛助会員 現在数 44名

3. 物故会員

名誉会員 三村悟郎

功労学術評議員 入山禄郎 尾形安三 片岡邦三
七理 泰 竹内節弥 玉井 一
三浦 清 吉田 尚

正会員 浅野純也 井上 隆 畝 義人

大島禮次郎 太田喜義 岡田泰助

香川景継 蠣崎 淳 柿添瓊子 加藤暢士

唐崎健吉 菊岡弘芳 木戸靖彦 久保 正

栗並 茂 見坊 隆 小林照雄 鈴間 泉

蘇馬隆一郎 田原和夫 筒井淳平

豊島博行 苗代麻美 古田浩二 松場 洋

宮原尚子 村田泰治 森平雅彦

（敬称略、連絡のあった方のみ）

2. 委員会報告

I. 「糖尿病」編集委員会 委員長 吉岡成人

1) 委員会開催 6回

平成24年5月18日、7月8日、9月9日、11月18日、平成25年1月27日、3月24日

2) 出版状況は第55巻4号から第56巻3号までの12誌と「第55回年次学術集会抄録号」を発行した。詳細は下表のとおりである。

	総頁数	原著	症例	報告	地方会抄録	編集者への手紙	委員会報告	特集	その他
Vol. 55 No. 4	66	3	4		東北				追悼文
Supplement 1	567	第55回年次学術集会							
No. 5	74	2	4		中四国1			1	
No. 6	69	4	3	1	中四国2				
No. 7	137	2	4			1	2		会報
No. 8	88	2	5		近畿1	1		1	
No. 9	81	2	7		近畿2				
No. 10	84	3	7		北海道		1		
No. 11	102	2	4	1	関甲信			1	
No. 12	90	2	5		中部				受賞講演総目次
Vol. 56 No. 1	67	2	3		北海道	1			会報
No. 2	84	2	3		近畿	1			
No. 3	60	2	3		東北				追悼文
計	1,569	28	52	2	11	4	3	3	6

- 3) 論文状況：平成 24 年 4 月 1 日より平成 25 年 3 月 31 日までの論文投稿数 (受付総数) は 114 編 (内訳：原著 53, 症例 47 編, 短報 5 編, 報告 2 編, 編集者への手紙 4 編, 委員会報告 3 編), この期間に採否決定した論文数は 117 編 (採択可 71 編, 否 38 編, 辞退 7 編, 期限切れ 1 編), 採択率は 65 % であった。採択日から掲載までの期間は約 3 ヶ月である。
- 4) 小泉順二委員長が理事退任により委員長残任期間 1 年を委員の中から互選した結果, 吉岡成人副委員長が委員長に, 副委員長には内規に基づき委員長指名により今川彰久委員に決定した。
- 5) 編集委員による「特集」を企画し掲載した。
- 6) オンライン投稿査読システム導入：現在, 紙媒体で取り寄せて査読を行っているが, 郵送費など諸費用節減も見込めることから, オンライン投稿査読システム導入することが決定した。現出版社である杏林舎自社システム「ScholarOne Manuscripts™」を 7 月稼働を目指し準備中である。また, システム導入にあたり投稿規定の一部改訂を行った。
- 7) 個人情報保護指針：査読に際しての個人情報保護の考え方について検討をおこない, 委員会内での運用を開始した。

II. 「Diabetology International」編集委員会

委員長 春日雅人

- ・平成 24 年度より, 改選に伴う委員交代, 担当理事の交代がなされ, 新メンバーで開催される第 1 回目の委員会を平成 24 年 5 月 19 日に開催し, その際, 委員長の選出を行った。前委員長を務めた春日雅人委員を引き続き委員長とすることが満場一致で決定され, 同委員がこれを承諾した。第 2 回目を平成 25 年 2 月 16 日に開催した。
- ・投稿数及び採択率の詳細は下表のとおり。
- ・また, 冊子体は 2012 年 Vol. 3-1 号, 2 号, 3 号, 4 号を全て予定通り定期刊行した。

2013 年 4 月 26 日現在

	2010	2011	2012	2013
Total Submitted	45	81	72	31
Monthly average	5.6	6.8	6	7.75
Total Decisioned	35	63	53	6
Accept	18	43	38	4
Reject	17	20	15	2
Acceptance Rate	51%	68%	72%	67%

2013 年 Vol. 4-1 号も 3 月末に発刊し, 現在, 2 号の発刊を 6 月末に予定している。

- ・当面の課題である, MEDLINE への収載には定期刊行がなされることが基本であるので, 今後も引き続き定期刊行を目標に投稿数の更なる増多を呼びかけていく予定である。
- ・平成 24 年 8 月より, 日本糖尿病学会と欧州糖尿病学会 (European Association for the Study of Diabetes: EASD) は, それぞれの学会員が学会誌を相互に閲覧できるサービスを開始した。また, 同年 10 月 1 日より 5 日間にわたり開催された, EASD において, DI への投稿を呼びかける活動を行った。
- ・日本語版 COI フォームを英訳した「英語版 COI フォーム」を作成し, 平成 25 年 1 月からの投稿においては, この COI フォームへの記載をお願いすることとした。

III. 「食品交換表」編集委員会 委員長 石田 均

1) 委員会の開催

食品交換表編集委員会 (A) は①平成 24 年 5 月 19 日, ② 9 月 17 日, ③ 12 月 9 日, ④平成 25 年 3 月 17 日の 4 回, 食品交換表改訂小委員会 (a) は①平成 24 年 5 月 19 日, ② 7 月 8 日, ③ 9 月 17 日, ④ 10 月 7 日, ⑤ 12 月 9 日, ⑥平成 25 年 3 月 17 日の 6 回, カーボカウント小委員会 (b) は①平成 24 年 5 月 19 日, ② 9 月 17 日, ③ 12 月 9 日の 3 回, 指導のてびき改訂小委員会 (c) は① 7 月 8 日, ② 9 月 17 日 ③ 10 月 7 日の 3 回行った。

(※5 月 19 日は A・ab, 7 月 8 日は ac, 9 月 17 日は A・abc, 10 月 7 日は ac, 12 月 9 日は A・abc, 3 月 17 日は A・ac の合同委員会であった)。

2) 出版事業 (平成 24 年 4 月 1 日～平成 25 年 3 月 31 日, () は発行以来の累計部数)

- ①糖尿病食事療法のための食品交換表 第 6 版
売上部数：152,278 部 (2,847,535), 発行部数：150,000 部 (2,950,000)
- ②糖尿病性腎症のための食品交換表 第 2 版
売上部数：6,770 部 (103,092), 発行部数：5,000 部 (108,000)
- ③英文版 食品交換表
売上部数：281 部 (3,212), 発行部数：0 部 (3,400)
- ④糖尿病食事療法指導のてびき 第 2 版
売上部数：1,114 部 (19,882), 発行部数：1,000 部 (22,000)
- ⑤ CD-ROM 版 (ver. 4) 食品交換表 第 6 版
売上部数：578 部 (2,483), 発行部数：0 部 (3,000)

- ⑥ CD-ROM 版 (ver. 2) 付糖尿病性腎症の食品交換表 第 2 版
売上部数：61 部 (2,223), 発行部数：0 部 (2,500)
- ⑦ 食品交換表 活用編
売上部数：7987 部 (72,637), 発行部数：5,000 部 (75,000)
- 3) 引用許可願いの審査状況 (平成 24 年 4 月 1 日～平成 25 年 3 月 31 日)
「食品交換表 第 6 版」について 37 件申請があり, 審査結果の内訳は無条件許可 11 件, 条件付許可 23 件, 審査前取り下げ 3 件であった。
「指導のてびき」について 3 件申請があり, いずれも無条件許可であった。
- 4) 小委員会活動と食品交換表の改訂について
「食品交換表第 7 版」を今秋に刊行することを目標として, 食品交換表改訂小委員会と指導のてびき改訂小委員会で具体的な改訂作業を行っている (「食品交換表第 7 版」の中に「指導のてびき」のエッセンスを盛り込み, 「指導のてびき」は改訂を行わないことになった)。「食品交換表第 7 版」刊行後, その内容を反映した「カーボカウントのてびき」(仮題)を刊行すべく, カーボカウント小委員会で原稿案を作成中である。

IV. 「糖尿病治療の手びき」編集委員会

委員長 石塚達夫

- ・本委員会では, 患者用書籍『糖尿病治療の手びき (改訂 55 版)』(2011 年 6 月発行, 南江堂) および指導者 (医師・コメディカル) 用書籍『糖尿病療養指導の手びき (改訂第 4 版)』(2012 年 6 月発行, 南江堂) の編集実務を行っている。
- ・今年度は 2012 年 5 月 17 日 (第 55 回 日本糖尿病学会会期中) に委員会を開催し, 『糖尿病治療の手びき』および『糖尿病療養指導の手びき』の今後の改訂時期と増刷時の修正内容についての検討を行った。
- ・『糖尿病治療の手びき (改訂 55 版)』は現在第 2 刷の準備中である。増刷時の修正内容は委員会内で検討し, ① HbA1c の表記を NGSP 値に変更, ② 新薬の追加・販売中止薬の削除, ③ 一部本文表記の変更, を行った (第 2 刷は 2013 年 5 月以降発行予定)。
- ・『糖尿病治療の手びき』は今後, 『科学的根拠に基づく糖尿病診療ガイドライン 2013』や『糖尿病食事療法のための食品交換表 (第 7 版)』などを反映した内容とすべく, 2014 年 5 月を刊行目標に 2013 年 5 月から改訂着手予定である。『糖尿病療養指導の手びき (改訂第 4 版)』については, 『糖尿病治

療の手びき』の改訂後に改訂着手予定である。

- ・なお, 『糖尿病治療の手びき (改訂第 55 版)』の売上は約 45,000 部, 『糖尿病療養指導の手びき (改訂第 4 版)』の売上は約 1,500 部である (2013 年 3 月時点)。

V. 小児糖尿病委員会 委員長 両宮 伸

- 1) 「小児・思春期糖尿病の手びき—コンセンサスガイドライン」第 4 版
平成 25 年度の「科学的根拠に基づく糖尿病診療ガイドライン」の刊行に合わせ検討する。また, 患者・家族, さらに一般小児科医を含めた対象への刊行物 (小児科版『糖尿病治療ガイド』) の要望がなされ, 日本小児内分泌学会からもこのような出版物の検討が要望された。
- 2) ISPAD Science School in Kyoto が開催された。
2012 年 8 月 31 日 (金)～9 月 5 日 (水) 京都リサーチセンターで日本大学小児科浦上達彦医師が運営責任者として開催し, 海外からの受講者および講師からも好評であった。
- 3) 小児科医の糖尿病学会への参加および活動充実について
 - a. 小児科医が糖尿病専門医を取得できる施設の条件緩和で教育連携施設の登録が増えている。さらに, 専門医試験問題への小児科枠の設定が要望された。
 - b. 各支部での専門医 (小児科) 取得・更新に関する地域別の問題点を明らかにする必要が討議された。
 - c. 小児科医の学術評議員枠の設定が要望された。
 - d. 平成 24 年から小児・思春期糖尿病シンポジウムが日本糖尿病学会後援の対象となり, 小児・思春期糖尿病研究会に改組された。平成 25 年度からは小児・思春期糖尿病研究会の年次集会として参加はオープンとなった。
 - e. 専門医更新のための講義の受講について, 小児科医の参加の機会を増やすための対策について, 日本小児内分泌学会や小児・思春期糖尿病研究会における講義枠や e-learning 等も認めてもらうよう要望が出された。
- 4) 間歇注入シリンジポンプの保険点数加算に伴い, 小児慢性疾患の適応を超えた年齢の対象者への助成について検討していくこととした。CGM についても施設基準の緩和が要望された。

VI. 日本糖尿病協会委員会 委員長 濱口和之

委員会は平成 24 年 5 月 17 日に学会・協会同委員会として開催され, 協会・学会の両者が相互の活動を

支援・協力するため、以下の事項が報告・協議された。

- 1) IDF-WPR 京都の開催について (学会)
2012 年 11 月 24 日～27 日に京都で開催の 9th IDF-WPR Congress/4th AASD Scientific Meeting のプログラムや広報・PR、参加登録などについて説明された。学会・協会それぞれのブースを出すにあたり、協会委員会で助力出来ることがあれば協力していく旨を確認した。
- 2) HbA1c 関連の啓発資料配布状況 (学会)
平成 24 年 4 月 1 日以降の HbA1c 国際標準化についての報道記者発表 (2012 年 1 月 20 日) に関する内容と、表記の変更に伴う啓発資料の配布状況についての報告がなされた。協会の企業委員会傘下のメーカーなどへの働きかけにより、学会が作成したパンフレットなどを今後も継続的に啓発活動を行い、臨床現場を通じた患者さんへの浸透を図っていくこととなった。
- 3) 療養指導者向け新雑誌「DM Ensemble」創刊 (協会)
本雑誌がコメディカルスタッフの活動の支援の場を設けるといふ目的の下に創刊された旨が説明され、将来的には療養指導士の単位の更新になるよう働きかけを続けていく予定であることが報告された。
- 4) インスリンケアサポート委員会の活動 (協会)
- 5) 日糖協療養指導・調査研究学術集会の開催 (協会)

VII. 選挙管理委員会 委員長 羽田勝計
委員 渥美敏也 鈴木 進 石田 均 榊原文彦
難波光義 松谷 朗 土井康文

- 1) 例年同様、本委員会は郵便、e-mail 等を利用して委員会活動を進めていくこととし、従来の申し合わせに従い、理事会推薦の羽田勝計委員を委員長とし、以下の事項を確認した。
平成 25 年度「会長選挙」の手順は前年度「会長選挙手順」を踏襲し、
・支部からの推薦締切日は平成 24 年 11 月 15 日 (木) とする。
・推薦された方の意思確認は 11 月 28 日 (水) までに事務局必着とする。
・理事長への報告は 11 月 30 日 (金) までに行う。
・12 月 9 日 (日) の定例理事会で、最終候補者 3 名を決定する。
・候補者の所信のフォーマットは前年度と同様とし、平成 25 年 1 月 11 日 (金) を締切日とする。

・候補者の所信が提出された後に委員会を開催する。

- 2) 平成 25 年 1 月 20 日に委員会を開催し、以降の進め方について協議検討した。
 1. 会長選出手順およびこれまでの手順についてそれぞれ確認した。
 2. 所信の確認
3 名の候補者から提出された所信について、内容、印刷の字体や文字数、行間隔などを検討し、本人への指摘事項を決定した。
 3. 今後の手順について
所信の手直し終了後に、規則に則り従来の形で理事長への報告、会員への周知、学術評議員への所信の送付等を行うことが確認された。
 4. 学術評議員会での投票手順の確認について
 - ①開票作業には、会長候補者のいない支部の委員と、候補者のいない支部から委員長が指名した者、委員長を含めて合計 8 名であたる。今回は北海道支部、東北支部、中国・四国支部、および九州支部所属の出席者から、3 名に依頼する。また、当日委員に欠席者がある場合は、上記 4 支部所属の出席者の中から追加して依頼する。
 - ②投票用紙配布直前に会場を閉鎖し、回収後開放する。このことは、学術評議員へ候補者の所信を送る際に記載する。
 - ③今回も候補者名を予め投票用紙に記載し、所定の欄に丸印を付したものを有効とする。
 - ④最多得票者に決定する。同数の場合は学会入会年月の早い者とする。
 - ⑤各候補者の得票数は公表する。
 - ⑥迅速に開票作業を行うため、投票用紙を折り曲げて投票する場合は「横二つ折りまで」とすることを注意事項として通達する。
以上は、議場で予め公表する。

VIII. 年次学術集会運営委員会 委員長 春日雅人
平成 25 年 1 月 6 日 (日) に下関市で委員会を開催し、平成 27 年に開催予定の第 58 回年次学術集会の開催候補地ならびにその会場等の視察を行い、種々の助言を行った。

IX. 「糖尿病学の進歩」プログラム委員会
委員長 春日雅人
平成 24 年 4 月 29 日に委員会を開催し、第 47 回「糖尿病学の進歩」は平成 25 年 2 月 15～16 日に四日市市で開催されることが住田安弘世話人から報告された。委員会からは postgraduate course としての性格をより明確化した観点からプログラムを作成すること、コ

メディカル向けや若手（研修医）向けのプログラムを充実させることを要望した。

「糖尿病学の進歩」ならびに「糖尿病の療養指導」の2冊の書籍は今回から出版を中止することとし、代わってe-learningならびにDVD化にあたっての問題点を検討した。

また、第48回「糖尿病学の進歩」は平成26年3月7～8日に札幌市で開催される予定であることが吉岡成人世話人から報告された。

X. 糖尿病の保険診療報酬に関する検討委員会

委員長 渥美義仁

(旧、内科系学会社会保険連合委員会)

本委員会は、2012年5月の理事会において承認された、内保連委員会を改組した委員会である。委員は、加来浩平委員、宇都宮一典委員、横田邦信委員、菅原正弘委員、渥美委員で構成される。第1回の委員会を10月8日に開催した。

従来、診療報酬に関しては内科系社会保険連合の担当委員が、2年ごとの診療報酬改定時に本学会の提案書をまとめ、他学会と調整して提案してきた。近年、糖尿病学会と関連した大きな改定は、平成18年の医師指導下の看護師による重症化予防フットケア、平成24年の日本病態栄養学会との共同提案による、“糖尿病透析予防指導管理料”，ポンプ関連診療報酬を適正化した、プログラム付きポンプ加算の新設、CSIIの在宅自己注射指導管理料の新設（1,230点）、在宅妊娠糖尿病患者指導管理料（150点）の新設などである。平成26年度の改訂に当たっては、学会本部コンピュータシステムのパブリックコメント機能確立を活かして、平成24年秋に、学術評議員を対象に診療報酬関連のパブリックコメントを収集した。このパブリックコメントでは、診療報酬上のさまざまな課題や要望が寄せられた。これらの要望と、これまで要望するも実現できなかった案件として、①地域の糖尿病診療連携の評価と、②非インスリン使用者の内の必要例に対する血糖自己測定加算を主な要望項目とした。他、今後、CSIIの毎月受診を緩めること、DPC病院での入院中のCGMの外だし、病棟のコンサルテーションの評価、など継続的にさまざまなルートで要望する予定である。

XI. 日本医学会に関する報告 評議員 門脇 孝

2012年6月21日、第142回日本医学会シンポジウム「糖尿病治療の最近の進歩」（組織委員/春日雅人・河盛隆造・門脇孝）が日本医師会館大講堂において開催された。

5月18日の臨時理事会で決定した門脇孝評議員、加来浩平連絡委員に加え、植木浩二郎用語委員、綿田裕

孝用語代委員の両氏を糖尿病学会の委員とすることを8月に決定した。

2013年2月20日に第80回定例評議員会が開催された。日本放射線腫瘍学会、日本臨床スポーツ医学会、日本熱傷学会、日本小児循環器学会、日本睡眠学会、および日本磁気共鳴医学会の新規加盟が承認された。

XII. 国際交流に関する報告 委員長 稲垣暢也

平成24年度の大きなイベントとして、2012年11月24日から27日に第9回IDF-WPR及び、第4回AASD Meetingを開催した。また、2013年2月10日には本イベント終了の報告会を開催し、参加者の人数やプログラムの実績に関する報告、また収支に関する報告を行った。本国際会議の記録を作成することが提案され、引き続き検討することとした。

1. 第9回IDF-WPR/第4回AASD Meeting 関連

- ・2012年5月17日 第5回プログラム委員会開催
- ・2012年6月30日 第5回広報委員会開催
- ・2012年7月28日 第6回プログラム委員会開催
- ・2012年10月12日 第6回広報委員会開催
- ・2013年2月10日 報告会開催

2. 世界糖尿病デー関連

2012年は過去最多の110箇所以上でブルーライトアップが展開された。従来行っていた東京タワーのブルーライトアップを2012年は開催せず、本年は第9回IDF-WPR/第4回AASD Meetingの宣伝も兼ねて、京都でのライトアップに傾注した。

京都市内の由緒ある建物にご協力頂き、世界糖尿病デーでもある、11月14日はもちろん、会期中もブルーライトアップを行った。世界遺産でもある京都清水寺には多大なるご協力を頂き、海外からのVIPをおもてなしするツアーを開催した。

今後は遊園地などの観覧車をブルーにし、ブルーサークルに見立てて、糖尿病の子供を無料で招待するなどのイベントへ発展させることを検討することとした。

3. AASD・JDI 関連

- ・2012年8月20日付で主たる運営事務所を麹町2-2-4へ移転した。
- ・2009年のAASD発足以来、Executive Board Memberを務めてきた田嶋尚子、南條輝志男前常務理事に代わり、稲垣暢也国際交流担当常務理事、谷澤幸生国際交流担当理事が就任することとなり、両名の承諾を得た。
- ・企業協賛を募るために2012年9月に協賛依頼

を送付したところ、現時点で 1,443 万円の協賛金を得ることができた。

- ・再三更新依頼を行った結果、団体および企業会員を含む会員数 1650 に対して、会費支払率は 84.5 % (日本個人会員 78.3 %) であった。
- ・2012 年 11 月 27 日に日韓フォーラムに関する事前の検討会議を開催し、韓国側と協議を行った。第 1 回日韓フォーラムの開催日を 2013 年 5 月 11 日とし、Plenary Lecture には谷澤幸生教授 (山口大学大学院医学系研究科) を推薦した。
- ・AASD の機関紙である JDI への投稿は順調に伸びており、2012 年 6 月にインパクトファクターを取得した。初回は 1.861 と高得点を付与された。

4. EASD 関連

- ・第 55 回年次学術集会会期中 (横浜: 2012 年 5 月 17 日から 19 日) に、第 3 回 East-West Forum が行われた。今回は糖尿病合併症をテーマに、東西の比較がなされた。聴衆が比較的少なかったため、今後のフォーラムの充実に向け、2013 年にバルセロナで開催される EASD (会期: 2013 年 9 月 23 日から 27 日) での第 4 回 East-West フォーラムのテーマや演者について引き続き検討する。また、現在、第 5 回を 2014 年に大阪で開催することが決定している。
- ・EASD と JDS 双方の公式な Annual Meeting において、お互いのブースを設営する提案がなされ、第 55 回年次学術集会 (横浜: 2012 年 5 月 17 日から 19 日) の際に EASD のブースを、2012 年 EASD Annual Meeting (Berlin: 2012 年 10 月 1 日~5 日) の際に、JDS のブースを設営した。
- ・日本糖尿病学会/日本糖尿病財団/EASD/EFSD の交換留学プログラムに際し、審査の結果、日本からの留学生として、田中治彦氏 (東京大学医学部附属病院 糖尿病・代謝内科) が選出された。ヨーロッパからの留学生は日本の受入側の都合につき、今回は派遣を見送ることにした。また、2013 年度も引き続き交換留学プログラムを継続するに際し、日本とヨーロッパの双方で募集を開始した。
- ・EASD と JDS 双方の学会誌である、Diabetologia と Diabetology International の相互閲覧を 2012 年 8 月より開始した。

5. ISPAD 関連

国際小児思春期糖尿病学会 (ISPAD) 主催の Science School for physicians は、2011 年夏に開催される予定

であったが、ISPAD 本部からの助言により 2012 年 (京都) に延期となっていた。この度、2012 年 8 月 31 日 (金) から 9 月 5 日 (水) 京都市リサーチセンターで開催し、海外からの受講者および講師からも好評であった。(実行委員長 浦上達彦氏; 日本大学小児科)

XIII. 学術調査研究・教育に関する報告

委員長 春日雅人

平成 24 年 7 月 29 日に委員会を開催し、以下の点を決定した。

- ①日本糖尿病学会研究助成費「糖尿病新診断基準の検証に関する研究」について、各研究代表者の初年度の間報告および第 2 年度の申請内容を検討し、第 2 年度の助成金額をそれぞれ決定した。
- ②来年度の若手研究奨励賞について、前回の委員長からの申し送り事項について各々検討した。「印刷公表」に関して「on line のみの公表で印刷されないもの」を「公表」に含まれる内容とするよう規定の一部を変更し、研究における演者の果たした役割の記載もれがないようその記載欄を申請書に設け、採点方法についても一部改善することとした。
- ③これまでの学会賞規定では受賞決定時期が早い時期に設定されており、委員会開催日の選択の余地が狭められているため、弾力的な運用が可能となるよう規定第 9 条の理事長への報告期日に「原則として」の文言を追記することとし、必要な手続きを経て、次年度の募集から新規定を適用することとなった。

(1) 糖尿病関連検査の標準化に関する調査検討委員会

Committee on the standardization of diabetes-related laboratory testing

(開始: 2007 年 8 月 19 日) 委員長 柏木厚典

平成 24 年 4 月 1 日付で、日本糖尿病学会理事会を中心に各関連団体と協調して進めてきた HbA1c 測定に関する JDS 値から NGSP 値への移行が順調に行われた。現在 HbA1c 測定に関して今後の検討事項は以下の点にまとめた。

1. NGSP 値測定システムへの移行調査: 国内で HbA1c 測定用の日常検査に用いる測定システムの試薬・機器メーカー 16 社への調査にて、11,088 件中 9,705 件 (87.5 %) が平成 24 年 8 月末までに移行を完了していた。残りは平成 25 年 3 月 31 日までにほぼ完了予定である。
2. 平成 25 年 4 月 1 日をもって、日常臨床・健診等全ての分野で、NGSP 値の使用がなされた。今後 NGSP 値単独表記・使用を推進する。

3. 平成26年4月1日以降、我が国で使用するHbA1c値はNGSP値を意味し、表記法は原則としてHbA1cとするが、既にシステム上HbA1c(NGSP)と印字されている場合には、次回の変更時点まで継続してよい。原則としてJDS値の併記を行わないことも周知徹底する。上記HbA1c値の運用計画に関しては、日本糖尿病学会が中心となって、関連学会・団体と連携して周知徹底をはかる。
4. 一般社団法人 検査医学標準物質機構からの報告で、HbA1cのこれまでの標準物質JCCRM411-2(JDS Lot 4)の重要が増加したため、新しくJCCRM 411-3(JDS Lot 5)が作成され、そのIFCC値はIFCC HbA1cラボラトリーネットワークに登録されている世界の6基準測定施設での測定値を解析した結果、IFCC-NGSP換算式は、これまで用いていたNGSP値=0.0915×IFCC値+2.15に完全に一致した。
5. HbA1c測定の将来的精度管理とサーベイランスについては、日本糖尿病学会から日本臨床検査学会への要請で、関連学会と合同での「HbA1c適正運用機構」が立ち上がり、当面POCT機器のサーベイランスを今年度末までに行うことが討議されている。
6. 血中インスリン測定の標準化が、残された大きな課題の一つであることが確認された。
 - (2) アンケート調査による日本人糖尿病の死因に関する研究委員会
委員長 中村二郎
委員：羽田勝計，稲垣暢也，谷澤幸生，荒木栄一，植木浩二郎，中山健夫，神谷英紀
ホームページからのWeb入力用システムに加えて、手書き入力用のアンケート用紙の書式が完成した。過去5年間の年次学術集会上において演題登録のあった施設データを整理した結果、1,165施設に対してアンケートへの協力を依頼することとなり、各施設のIDとパスワードの設定が終了した。5月の第3週に依頼状を送付する予定である。
 - (3) 日本人1型糖尿病の成因，診断，病態，治療に関する調査研究委員会
共同委員長：花房俊昭
共同委員長：小林哲郎
劇症および急性発症1型糖尿病分科会（委員長：花房俊昭）
劇症1型糖尿病診断基準を改訂し、劇症1型糖尿病診断基準（2012）として発表した（「糖尿病」2012年10月号，DI2012年3巻4号，JDI2012年3巻6号）。急性発症1型糖尿病診断基準を作成し、現在学会誌「糖尿病」に投稿中である。皮膚科学会と合同

で行った薬剤誘発性過敏性症候群（DIHS）合併劇症1型症例の実態調査の論文が発表された（JCEM 97（12）：E2277-81）。劇症1型糖尿病のMRI所見については2012年糖尿病学会年次学術集会で報告し、現在も継続調査中である。劇症1型糖尿病の登録は現在432例である（2013年2月現在）。

緩徐進行1型糖尿病分科会（委員長：小林哲郎）

第2回緩徐進行1型糖尿病分科会を本年2月に開催した。緩徐進行1型糖尿病診断基準の委員会報告について合意が得られ、学会誌「糖尿病」に投稿した。また「2型糖尿病に合併した緩徐進行1型糖尿病」，「長期にわたりインスリン治療が必要とならないGAD抗体陽性糖尿病」に関する調査の進捗が報告され、引き続き調査が継続される事となった。

遺伝子解析チーム（チームリーダー：池上博司）

日本人1型糖尿病の体質を明らかにして、診断・予防・治療に資する情報を得ることを目的に、3つのサブタイプ（急性発症，劇症，緩徐進行）の疾患感受性遺伝子解析の網羅的解析を進めている。ゲノムワイドのアソシエーションスタディ（GWAS）の一次スキャン（900KのSNP）ならびに二次パネルを用いた解析を完了、有望なSNP複数に関する三次パネルでの検証，imputation，HLA層別解析，欧米GWASで同定された候補遺伝子の解析を行うとともに、欧米のGWASデータとのメタ解析へむけて欧米データベースへのアクセス許可申請を進めている。

(4) 東日本大震災からみた災害時の糖尿病医療体制構築のための調査研究委員会

委員長 佐藤 譲

委員：佐藤 譲（NTT東日本東北病院），横野浩一（神戸大）（副委員長），片桐秀樹（東北大），渡辺 毅（福島医大），八幡和明（長岡中央総合病院），高橋和真（岩手医大），石垣 泰（東北大），佐藤博亮（福島医大）土屋陽子（岩手県立大学），安藤里恵（岩手県立大学）

本委員会は東日本大震災後の2011年5月に、東日本大震災の被災糖尿病患者と医療従事者を対象に、東日本大震災が糖尿病に及ぼした影響について調査し、将来の災害に備えた糖尿病医療の緊急時さらには中長期的支援対策を構築するための一助として発足した。

2011～2012年に東日本大震災の被災3県（岩手，宮城，福島）の被災糖尿病患者（2,503人）と医療従事者（医師，看護師，栄養士，薬剤師，医療支援チーム）（1,399人）を対象に東日本大震災が糖尿病および糖尿病医療に及ぼした影響についてアンケート調査し、2012年7月に「東日本大震災から見た災害時

の糖尿病医療体制構築のための調査研究班：アンケート調査結果報告書」(日本糖尿病学会)として報告した。

本年(2013年)はアンケート調査結果を踏まえ、医療従事者(医師・コメディカル)に向けた災害時における糖尿病医療者のための診療マニュアルを出版する予定であり、執筆作業が進行中である。

書名：「糖尿病医療者のための災害時糖尿病診療マニュアル」(日本糖尿病学会編)

出版社：文光堂(B5判/2色刷り/約80頁)

執筆者：調査研究班委員、他

内容(項目)：省略

(5) 糖尿病新診断基準の検証に関する研究(開始：2011年9月1日)

(5-i) Cross sectional studyとLongitudinal studyによる糖尿病新診断基準の検証

伊藤千賀子 会員

伊藤千賀子¹⁾、藤川のみ¹⁾、吉良さくら²⁾

¹⁾グラントタワー メディカルコート ²⁾広島原対協 健康管理・増進センター

2010年の糖尿病診断基準のFPG \geq 126 mg/dlとHbA1c(NGSP) \geq 6.5%の意義を分析した。対象は1982年~2010年までのOGTT受診者11,968例である。

1) OGTTで糖尿病型と判定された2032例のうち、FPGとOGTT2hPG共に糖尿病型の症例は70歳以上では約1/3となっており、高齢者ではFPGに比してOGTT2hPGが高いものが多いことを示している。

2) 初診時のFPG \geq 126 mg/dlでHbA1c \geq 6.5%であった1445例について経年後のOGTT成績を比較すると、経年後も同一判定であったものは高齢者が若干低いものの全体で86.0%であった。また、HbA1c $<$ 6.5%の糖尿病型へ移行したものは9.4%、非糖尿病型へは僅か4.6%であった。

3) 糖尿病型でHbA1c \geq 6.5%を糖尿病、残りを糖尿病型として糖尿病発症率を比較した。FPG $<$ 100 mg/dl群では糖尿病型への発症率は19.5/1000人年に対し、糖尿病への発症率は4.8と1/4に過ぎなかった。FPG 100~109 mg/dl群ではそれぞれ34.6および8.9、FPGが110~125 mg/dlでは68.8および21.1で両群の差はFPGの上昇に伴って低下した。この様にHbA1c \geq 6.5%を加えると糖尿病発症率は1/4~1/3に低下してくる。発症率からみてもHbA1c \geq 6.5%を加えた糖尿病は軽症糖尿病や早期糖尿病が見逃される可能性が高いので、注意が必要である。

糖尿病発症のハザード比は年齢、OGTT2hPG、

BMI \geq 25 kg/m²の肥満、高中性脂肪血症が有意であり、何れも糖尿病群で糖尿病型群に比して高くなっていた。FPGを $<$ 100、100~109、110~125 mg/dlに区分すると、ハザード比は糖尿病型群では2.024、糖尿病群では5.106と高く、FPGの糖尿病発症への寄与リスク比率も80%となり、HbA1cにはFPGの関連が強いと思われる。

4) まとめ：①FPG \geq 126 mg/dlとHbA1c \geq 6.5%の糖尿病は60歳未満の場合は70%以上拾い上げるが、高齢者では半数以下に過ぎない。②糖尿病発症率はHbA1cを加味して判定するとOGTTで糖尿病型への移行率に比して1/4~1/3に低下する。③FPGとHbA1cが共に糖尿病型を示す糖尿病を経過観察すると、90%近くが経年後も同一判定となっていた。

2010年の基準ではFPGとHbA1cを同時に測定して糖尿病を拾い上げるには極めて効率的と思われるが、軽症糖尿病の拾い上げは困難と言わざるを得ない。

(5-ii) 日本人における糖尿病新診断基準の疫学的検証

中神朋子 会員

半期報告(2011/9/1-2012/3)

初年度は、栗橋Life-style cohort研究の横断データを用いて

1. 非既知糖尿病において網膜症有病率は3.8%と低率、収縮期血圧とFPG/HbA1cは正の連続性をもつ独立した網膜症の危険因子である、FPG 126 mg/dl以上、HbA1c 6.5%以上で有意に有病率が上昇することを報告した。

2. 非糖尿病におけるHbA1c変化量(Δ)を調査し平均3.3年に平均HbA1cは0.08%上昇。観察開始時のBMIより Δ BMIが Δ HbA1cに強く関係しており体重維持が耐糖能進展防止の要と報告した。

3. 身体活動量と炎症指標(白血球数)の横断データを解析し、就業中の男性では運動量の増加が白血球数上昇を抑制し心血管危険因子悪化に可能性があることを報告した。また、血清ビリルビン(Bil)低値が男女ともに耐糖能進展に影響する可能性を報告した。

年間報告(2012/4/1-2013/3)

栗橋Life-style cohort研究の前向き調査のデータ等を解析し学会で報告の予定。

1. 追跡5年目にFPGならびにHbA1c基準でDM発症は6.2%と5.4%。調整後のハザード比はFPG 100 mg/dl、HbA1c 6.0%から有意に上昇した。FPG、HbA1cのDM予測能は同一で極めて高くFPG 100 mg/dlとHbA1c 6.0%の感度と特

異度も近似し、糖尿病発症からみた境界域のカットオフは FPG 100 mg/dl, HbA1c 6.0 % と思われた。

2. Hb と HbA1c の関係を非糖尿病で分析. 同一の年齢, BMI, FPG であっても Hb が下がると HbA1c は上昇 (+6 g/dl/-0.2 %) し, さらに同一の Hb でも女性では男性より HbA1c は 0.05 % 高値. HbA1c を用いて糖尿病の診断を行う際に注意が必要と思われる.
3. 肥満と心血管危険因子の悪化の関係を観察. 肥満の有無によらず脂質, 血圧異常のあるものは糖代謝異常を悪化させるため, 肥満の有無が第一関門の糖尿病検診に問題があることを再確認した.
4. 肺機能の糖尿病と MetS 発症に及ぼす影響を検討し 1 秒率ならびに % 肺活量が糖尿病と MetS 発症進展の独立した関連因子であることが示唆された.
5. 出生時体重から糖尿病有病リスク, インスリン感受性と分泌能の関連を検討し, 低出生体重者 (5.3 %) は正常出生体重者に比べて糖尿病有病リスクを 4.2 倍, 高インスリン抵抗性リスクを 3.9 倍上昇させ, インスリン分泌能と関連は認めなかった. 今後, 低出生体重児における前向き調査が必要と思われた.

(5-iii) 日本人糖尿病の特徴からみた新診断基準の評価 福島光夫 会員

IFG₁₀₀₋₁₀₉ 群についての解析

2010 年日本糖尿病学会の診断基準に関する委員会報告で新たに明記された内容の中で, 特に HbA1c 6.1-6.4 % (JDS 値) にある群 (HbA1c_{6.1-6.4} 群) と, 空腹時血糖 (FPG) 値が 100-109 mg/dl にある群 (IFG₁₀₀₋₁₀₉ 群) に注目し解析を行った. IFG₁₀₀₋₁₀₉ 群についての結果は, 2012 年 5 月の日本糖尿病学会年次学術集会和 2012 年 11 月の IDF-WPR において発表し, J Diabetes Invest 3: 377-383, 2012 に publish された. IFG₁₀₀₋₁₀₉ 群は, アメリカ糖尿病学会 (ADA) では IFG, 世界保健機構 (WHO) では正常型, 日本糖尿病学会では正常高値に分類され, この群の取り扱いについては, 今なお世界中で議論の対象となっている (下記*参照). 健診受診者を対象として IFG₁₀₀₋₁₀₉ 群について調べると, その約 40 % は経口糖負荷試験 (OGTT) 2 時間血糖 (2h-PG) 値が境界型あるいは糖尿病型の領域にあり, この群に OGTT を勧めることの必要性が示された. またインスリン分泌能を $\text{insulinogenic index} = (\text{負荷 30 分後インスリン値} - \text{空腹時インスリン値}) / (\text{負荷 30 分後血糖値} - \text{FPG 値})$, インスリン感受性を $\text{ISI composite} = 10000 / [(\text{FPG 値} \times \text{空腹時インスリン値}) (0-120$

分の平均血糖値) (0-120 分の平均インスリン値)]^{0.5} を用いて解析すると, IFG₁₀₀₋₁₀₉ 群の 2h-PG 値上昇要因にはインスリン分泌能の低下が重要な役割を果たしていることが明らかとなった.

HbA1c6.5-6.9 % 群の解析

HbA1c 値が 6.5-6.9 % (NGSP) にある群は 2010 年の委員会報告で, 血糖値と HbA1c 値が基準を満たせば, 一回の採血で糖尿病と診断できることになった点は今回の改定の重要な部分である. 健診で OGTT を受けることになった 10992 例のうち 209 例が HbA1c6.5-6.9 % にあり, このうち正常型 9 %, 境界型 33 %, 糖尿病型 58 % であった. 糖尿病型の中で, FPG 値のみが糖尿病型を呈した 15 % と, FPG・2hPG 値共に糖尿病型を呈した 47 % を合わせ 62 % が空腹時の 1 回採血で糖尿病と診断できることになった群である. 一方で 2hPG 値のみが糖尿病型を示すのは残りの 38 % であり, HbA1c 値が 6.5-6.9 % にある群では, FPG 値が糖尿病領域になくても OGTT が推奨されることが示された. 本解析により今回の診断基準改定が糖尿病診断の迅速化に役割を果たしているとともに, OGTT の必要性が明らかとなった. 本解析の結果は, 2013 年 5 月の日本糖尿病学会総会において発表予定である.

HbA1c 値が 6.5-6.9 % にある群についてさらに解析を進め, 診断やスクリーニングのための効率について評価する. またインスリン分泌能とインスリン感受性の観点から, 他民族のデータとの比較・検討により, 日本人糖尿病の発症過程を明らかにするとともに, 日本人糖尿病の特徴からみた新診断基準の評価を行う.

(*アメリカ糖尿病学会 (ADA) は 1997 年に, 世界保健機構 (WHO) は 1998 年に, 日本糖尿病学会は 1999 年に診断基準を改訂し, FPG 値 110 mg/dl 未満を正常型, 126 mg/dl 以上を糖尿病型, OGTT 2h-PG 値 140 mg/dl 未満を正常型, 200 mg/dl 以上を糖尿病型とし, 世界的に糖尿病診断基準のカットオフ値は統一された. しかし 2004 年に ADA は正常領域と境界領域のカットオフ値を 100 mg/dl に引き下げ, これ以来 FPG 値が 100-109 mg/dl にある群は ADA では IFG, 日本と WHO では正常型に分類されることになった. 2008 年に日本糖尿病学会は委員会報告を発表し, この領域にあるものを正常高値として正常型と区別することを提唱した. 2010 年の委員会報告で, FPG 値が 100-109 mg/dl にあるものに, 75 g 経口糖負荷試験 (OGTT) を行うことが勧められることが明記された点は, 新たに追加された内容である.)

(5-iv) 地域住民における糖尿病の診断基準としての HbA1c の意義：久山町研究
 期間：2011 年 9 月 1 日～2013 年 3 月 31 日
 (第 1 および第 2 年度) 向井直子 会員

2011 年度は福岡県久山町の横断調査において、75 g 経口糖負荷試験 (OGTT) に基づいた HbA1c による糖尿病 (DM) の診断基準の妥当性を検討した。

40-79 歳の住民 2,854 名に OGTT を行い、HbA1c を測定した。その結果、HbA1c \geq 6.5 % および 5.7-6.4 % で定義した DM と境界型の有病率はそれぞれ 9.2 %, 12.8 % で、OGTT による有病率 (DM:18.1 %, 境界型:31.1 %) に比べいずれも低かった。耐糖能レベル別に HbA1c の分布をみると、OGTT で定義した DM の 28.8 % のみが HbA1c \geq 6.5 % で、境界型の 17.6 % のみが HbA1c 5.7-6.4 % であった。OGTT による DM の同定に対する HbA1c 6.5 % の感度は 28.9 %, 特異度は 99.9 % で、境界型の同定における HbA1c 5.7 % ではそれぞれ 17.7 %, 95.2 % で、いずれも感度が低かった。

以上より、HbA1c の診断基準では OGTT に比べ DM と境界型の有病率が低く見積もられ、その多くが見逃されることが示唆された。この研究成果は、2012 年の第 55 回日本糖尿病学会年次学術集会において発表した。

2012 年度は、久山町の糖尿病網膜症 (DR) の有病率調査の成績より、DM の診断に対する血糖関連指標のカットオフ値とその有用性を検証した。

40-79 歳の住民 2,681 名に OGTT を行い、HbA1c, グリコアルブミン (GA), 1,5-AG を測定し、DR の有無を判定した。空腹時血糖値 (FPG), 負荷後 2 時間血糖値 (2hPG), HbA1c, GA, 1,5-AG レベルの 10 分位別にみると、DR の頻度は FPG では 112-123 mg/dl, 2hPG では 166-224 mg/dl, HbA1c では 5.9-6.2 %, GA では 16.2-17.5 % 以上のレベルで、1,5-AG では 9.6-13.5 μ g/ml 以下のレベルで急上昇した。ROC 解析でのカットオフ値は FPG 117 mg/dl, 2hPG 207 mg/dl, HbA1c 6.1 %, GA 17.0 %, 1,5-AG 12.1 μ g/ml だった。感度および ROC 曲線下面積はいずれも 2hPG が最も高かった。一方、FPG, HbA1c, GA, 1,5-AG の間で ROC 曲線下面積に有意差は認めなかった。

以上より、DM 診断のカットオフ値は FPG, HbA1c では現在の診断基準値に比べ低く、2hPG ではほぼ一致した。診断能は 2hPG が最も高く、FPG, HbA1c, GA, 1,5-AG ではほぼ同等であることが示唆された。この研究成果は、2013 年の第 56 回日本糖尿病学会年次学術集会にて発表予定である。

(6) 糖尿病治療に関連した重症低血糖の調査委員会
 委員長 難波光義
 委員：渥美義仁, 佐藤 譲, 岩倉敏夫, 松久宗英,
 西村理明, 山内敏正

「一定の病気等に係る運転免許制度の在り方」の法改正に関連し、重症低血糖の実態を把握のための委員会として発足した。

- (1) 救急受診または入院加療を要した重症低血糖の頻度の集計
- (2) どのような治療に関連して発生した低血糖であるか治療種別の集計
- (3) 自覚症状の有無をはじめとする特徴の把握
- (4) 実際の患者の生命に与えた危険 (関連して発生した心臓発作や突然死, 車両運転における死亡事故もしくは物損事故) の解析

を課題とし、委員会活動を行なう。第 1 回の委員会は平成 25 年 4 月に予定されている。

(7) 膝・膝島移植に関する常置委員会
 委員長 稲垣暢也
 委員：岩本安彦, 栗田卓也, 脇 嘉代, 豊田健太郎,
 後藤満一 (日本膝・膝島移植研究会より)

膝臓移植中央調整委員会の事務局が本学会へ移転することに伴い、これまで不足していた移植後のフォローアップ調査のために、学会内に常置委員会を設置することが提案され、理事会にて承認された。膝・膝島移植前後に関するデータベースの構築ならびにその評価、膝・膝島移植の成績に関する調査・研究、膝臓移植中央調整委員会や日本膝・膝島移植研究会との連携、膝臓移植中央調整委員会に対する提案等も含め、活動を行なう予定である。

XIV. 平成 25 年度坂口賞および学会賞に関する報告

- 1) 坂口賞は、河盛隆造氏に授与する。
- 2) 学会賞審査委員会 (春日雅人委員長) を平成 25 年 1 月 26 日に開催し、各受賞者を選出した。

①平成 25 年度ハーゲドーン賞

羽田勝計 (旭川医科大学 内科学講座 病態代謝内科学分野)

「糖尿病性腎症に関する基礎的・臨床的研究」

②リリー賞

i) 山田哲也 (東北大学 医学系研究科 代謝疾患学分野)

「臓器間相互作用が司る糖代謝とエネルギー代謝のクロストーク」

ii) 片上直人 (大阪大学大学院 医学系研究科代謝血管学寄附講座)

「糖尿病大血管症の病態解明と早期診断」

XV. 学会認定事業に関する報告

1) 専門医認定委員会 委員長 谷澤幸生

委員会は小委員会も含め8回開催された。平成24年度の専門医試験は290名が受験し、254名(試験での合格率88%)が合格した。

昨年度までは合格率を、書類審査を経て受験が認められた受験者数から算出していたが、今年度からは全申請者301名から算出し、公表・記録することとする。今年度、第23回専門医試験の合格率は84%であった。

研修指導医は96名(随時審査も含む)、認定教育施設は21施設、教育関連施設11施設、連携教育施設2施設が新たに認定された。更新は専門医699名・研修指導医256名・認定教育施設73施設であった。専門医更新辞退者23名、研修指導医更新辞退者6名があり、平成25年4月における専門医数は4,777名、研修指導医1,586名、認定教育施設626施設(無床8施設含)、教育関連施設46施設、連携教育施設(小児科)8施設である。

研修カリキュラム・カリキュラムチェックリストの改訂がほぼ終了し、運用方法等の整備を進めていく。同時に、教育施設の在り方についての検討も進めており、単独施設では必要な症例全てを経験できないなど、カリキュラムで求められる研修の完遂が困難な場合、複数施設をローテートすることにより研修を行うことを前提とするように施設の研修カリキュラムを改訂し、実施していただくように、施設認定の更新時に全施設へ通達している(年間報告書に在中)。

専門医更新のための指定講演の一部をe-learning化することについては、来年度からの運用を目指し、検討を進めることとした。今年度専門医更新のための指定講演の聴講が必要な専門医は、1,948名である。

前回理事会で承認された海外で関連する専門医資格を取得したものに対しての日本糖尿病学会専門医資格申請の条件について、記載内容がより明確になるように解説の一部を改訂することとした。また、専門医試験委員会から専門医試験委員の選出に関して、研修指導医であることを専門医制度規則に明文化してほしいとの依頼を受け、改訂することとした。

新内科専門医制度に対して、学会として内科学会へ糖尿病臨床研修開始時期等について意見書を提出したが、認定委員会としても新たな専門医制度に対して提案を行い、また、新制度に対応できるように引き続き情報収集と準備を進めてゆく。

2) 専門医試験委員会 委員長 荒木栄一

平成24年5月18日、第37回試験委員会を開催

し、第23回専門医試験の試験方法と出題問題の作成分担、口頭試験担当者、試験監督担当者を決めた。

8月5日に委員長、数名の委員により試験問題のチェックを行い、9月23日に委員全員で試験問題の選定を行った。第23回専門医試験は、平成24年10月28日、東京国際フォーラムにおいて実施した。受験者には例年通り、事前に一部出題範囲・面接での評価について公表し、選択問題もマークシート方式で実施した。

受験者は290名で、11月11日に合否判定案を作成、11月18日専門医認定委員会に報告、254名の合格(試験での合格率88%)が決定された。今年度も希望のあった受験者に対し成績の開示を行なった。

2013年度から面接官は研修指導医に依頼することに決まった。また、専門医試験委員の選出についても元より研修指導医に依頼していたが、規則で明文化することを専門医認定委員に要望した。

第24回(平成25年度)の試験は平成25年10月27日(日)都市センターにて、第25回(平成26年度)の試験は平成26年10月26日(日)東京国際フォーラムにて実施を予定している。

XVI. 分科会に関する報告

日本糖尿病合併症学会 幹事長 羽田勝計

日本糖尿病学会の分科会である日本糖尿病合併症学会は、第27回日本糖尿病合併症学会年次学術集会を、梅田文夫会長(医療法人森和会 行橋中央病院)の下、第18回日本糖尿病眼学会総会と合同で平成24年11月2、3日の2日間、アクロス福岡にて開催した。

年次学術集会は、シンポジウムが合併症学会として6題、眼学会と合同で3題、そして一般演題は例年通り全てワーク・ショップ形式で行われた。市民公開講座も11月3日に開催された。本学会が設けた学会賞各賞の受賞者は以下の各先生で、Outstanding Foreign Investigator AwardはMaria F. Lopes-Virella先生(VA Medical Center, Charleston, South Carolina, USA)、Distinguished Investigator Awardは伏見尚子先生(住友生命保険相互会社)、Expert Investigator Awardは片山茂裕先生(埼玉医科大学 内分泌・糖尿病内科)、Young Investigator Awardは藤田浩樹先生(秋田大学大学院 内分泌・代謝・老年内科学)、喜多岳志先生(九州大学大学院 眼科学分野)、三浦順之助先生(東京女子医科大学 糖尿病センター)に贈呈され、受賞講演が行われた。

第28回日本糖尿病合併症学会年次学術集会は、羽田勝計会長(旭川医科大学)の下、平成25年9月13、14日の2日間、旭川グランドホテルにて開催されることが決定している。学会の機関誌「糖尿病合併症」は

抄録号を含め 3 回発行された。

VII. 糖尿病総合対策への取り組みに関する報告

理事長 門脇 孝

2012 年 12 月 3 日に開催された日本糖尿病対策推進会議第 14 回幹事会において、平成 25 年度以降における HbA1c 国際標準化の運用計画ならびに「対糖尿病戦略 5 カ年計画」(第二次および三次 5 カ年計画)について報告した。また、日本糖尿病対策推進会議の設立時から尽力された伊藤千賀子常任幹事、および岩本安彦常任幹事が退任され、後任として荒木栄一常任幹事、植木浩二郎常任幹事の就任が承認された。

1. 「対糖尿病戦略 5 カ年計画」作成委員会

委員長 植木浩二郎

委員：渥美義仁，荒木栄一，稲垣暢也，佐倉 宏，
谷澤幸生，野田光彦，花房俊昭，羽田勝計
委員会：開催なし

第二次対糖尿病戦略 5 カ年計画英語版 (5-year Anti-Diabetic Strategic Plan—The second term—)を作成し、第 9 回 IDF-WPR congress において配布した。

「第二次対糖尿病戦略 5 カ年計画」の策定に尽力された岩本安彦委員長が退任し、後任に植木浩二郎が就任した。現在、「第三次対糖尿病戦略 5 カ年計画」の策定にむけて構想中である。

2. 「健康日本 21」の糖尿病対策検討委員会

委員長 荒木栄一

(1) 委員会開催：2012 年 6 月 24 日，8 月 19 日と 9 月 28 日の 3 回開催したが，糖尿病治療のエッセンス作成に当たって詳細部分の検討は e-mail で行った。

(2) 委員会活動

平成 24 年 5 月 18 日に第 55 回日本糖尿病学会年次学術集会時に糖尿病対策推進会議地区担当者連絡会議を開催し，日本糖尿病対策推進会議の幹事会活動と今後の方針について報告がなされた。次いで各県の担当者から地域の問題点や今後の方向性について提議された。その後 佐藤讓委員と土井邦紘委員の司会で，熊本県の古川昇先生からねんりんピックの報告，富山県の石橋修先生，滋賀県の前川聡先生，岐阜県の戸谷理英子先生から活動報告がなされ，問題点や今後の方向性を討議した。

本年度は委員会を 3 回開催して「糖尿病治療のエッセンス 2010-2011」の改訂作業に着手した。前回 (3 月 20 日) の委員会で検討した「糖尿病治療のエッセンス」の改訂内容について各委員が担当部分の変更案を提示し，それぞれ検

討した。今回から文光堂の担当が頼高氏から佐藤氏に代わったが，糖尿病学会の伊藤田氏に学会，委員会，医師会の要として尽力頂いた。

今回の改訂版は 2012 年版とし，「HbA1c 国際標準化に対応」の文字を表紙に挿入した。6 月 24 日の委員会では各担当が修正箇所を持ち寄り，皆で討議した。7 月中旬に初校ゲラを出して事務局から各委員に送付して 7 月末に回収した。

その後再ゲラを作り 8 月 19 日に第 2 回の委員会を開催した。一番問題となったのは新しい薬剤で申請中のものの扱いであった。本書の次回改訂版の出版は経費的な問題で相当先になると思われるため，製造承認に近い薬剤は申請中として欄外に記載することとなった。しかし，9 月 28 日に全て製造承認が認められ，最終的には欄外記載する薬剤はなくなった。

主な改訂内容は 1) NGSP 値の記載を主として JDS 値は小さく併記，2) 治療目標について使用されている HbA1c の値は混乱を回避するために現在診療で使用されている NGSP 値と，JDS 値も小さく併記 3) インクレチン製剤は他の血糖降下薬の表の中に挿入 4) 妊娠について少し補足 5) 高齢者の低血糖について注意を喚起 6) Non-HDL コレステロールも言及 7) 歯周病について少し詳しく記載 等である。

2012 年の糖尿病治療のエッセンスは予定通りに 2012 年 11 月末にすべて完成して，12 月に日本医師会雑誌ならびに本学会の学会誌「糖尿病」に同封されて各会員に配られた。

2012 年 12 月の定例理事会において，日本糖尿病対策推進会議の常任幹事の交代が承認され，それに伴い本委員会の伊藤千賀子委員長が退任され，新委員長に荒木栄一が就任した。

3. 糖尿病データベースの構築委員会

委員長 田嶋尚子

・JDCP study (糖尿病における失明，歯周病，腎症，大血管合併症などの実態把握とその治療に関するデータベース構築による大規模前向き研究) は，近年におけるわが国の糖尿病患者の合併症の実態を追跡調査し，種々の糖尿病管理・治療と合併症発症・進展との関係を検討する試験で，平成 23 年度から日本糖尿病学会による中核的学術研究事業研究として，データベース構築委員会が遂行してきた。

・研究の概要は以下のとおりである。JDCP study cohort は 40~75 歳未満の 1 型・2 型糖尿病患者 6,439 名 (2007 年 6 月~2009 年 11 月

に全国の大学病院、基幹病院および診療所に通院中)で、観察期間1年、2年、3年、4年目の追跡率は、それぞれ90.4%、83.3%、73.9%、44.9%であった。対象は、2型糖尿病93.7%、男性59.1%、年齢61.1歳、罹病歴11.2年、BMI 24.7、血圧130/75 mmHg、HbA1c (JDS値) 7.1% (<6.5%達成率34.1%)、網膜症なし73.8%、腎症I期61.3%、インスリン治療32.7%であった。追跡2年間における大血管障害のイベント発生は215件、冠動脈疾患が60.7%を占めた。死亡は38名で、死因は悪性腫瘍、心血管イベントの順であった。

- ・平成24年度の研究重点項目は、各ワーキンググループの活動の推進であり、分野別に作業部会を開催し、イベント発生の判定および解析に向けた作業を行った
- ・本研究の必要性に鑑みて、研究期間の5年間の延長をデータベース構築委員会研究統括委員会に申請し承認された。今後とも90%以上の追跡率で調査を遂行し、信頼性と汎用性に優れたデータベースを構築して、糖尿病合併症の発症・進展に及ぼすリスク因子を解析する予定である。
- ・平成24年3月31日をもって、日本糖尿病学会とシミック(株)との契約提携は終了した。平成24年4月1日からは、公募により決定した(株)フレキシブル(石原吉浩代表)に研究業務の一部を委託した。前研究委託業者との引継ぎは円滑に終了し、定例会議を毎月2回開催した。

XVIII. HbA1cの国際標準化と新目標値の普及に関する報告

理事 植木浩二郎

平成25年4月1日より特定健診・特定保健指導においてHbA1cの表記がNGSP値単独となること、平成26年4月1日までに日常臨床・検診においてもNGSP値単独表記に移行すること、また平成25年6月1日よりHbA1cの新目標値が施行されることなどに伴って、日本糖尿病協会・日本医師会など関係団体とも協議の上、これらの普及・啓発を図る目的でポスター・リーフレット(日本糖尿病推進会議監修)を作成し、配布を開始した。また、これらの資料については、日本糖尿病学会ホームページからダウンロード可能となっている。

XIX. 各種委員会

1) 糖尿病治療ガイド編集委員会

委員長 荒木栄一

委員：渥美義仁、荒木栄一、稲垣暢也、今村 聡、貴田岡正史、谷澤幸生、中村二郎、野田光彦、綿田裕孝

委員会開催3回：平成24年5月19日(於：横浜)、平成24年12月22日(於：東京)、平成25年2月15日(於：四日市)

1. 「糖尿病治療ガイド2012-2013」の発行と売上状況

平成24年4月下旬に「糖尿病治療ガイド2012-2013」を発行し、本年度(平成24年4月～平成25年3月末)の発行部数は140,000部、売上部数は136,287部である。

2. 「糖尿病治療ガイド2012-2013」英語版(学会ホームページ掲載用)の制作

「糖尿病治療ガイド2012-2013」より、おもに日本に特有の内容を抜粋して英訳したものを作成し、日本糖尿病学会ホームページ上で公開する予定である。「Treatment Guide for Diabetes 2007」(平成24年4月で絶版)を担当した翻訳者(クリス・レイノルズ氏)が今回も英訳し、日本語版の各章の分担にもとづいて委員が校正作業を進め、平成25年半ば頃迄に完成させることを目標としている。

3. 「糖尿病治療ガイド2012-2013 <血糖コントロール目標値改訂版>」について

平成25年3月に、HbA1c6.0%、7.0%、8.0%を目安とする新しい血糖コントロール目標値の図が決定したため、「糖尿病治療ガイド2012-2013」25頁の図7「血糖コントロール指標と評価」、および本文中の関連箇所を修正して、「糖尿病治療ガイド2012-2013<血糖コントロール目標値改訂版>」を刊行することになった。表紙に帯を刷り込むなどの工夫をする予定である。また、頁がずれない程度で新しい薬の情報などを加筆することも考慮して校正中である。

2) インターネット委員会

委員長 谷澤幸生

・平成24年度インターネット委員会を平成24年5月18日に横浜で開催した。

・平成24年度より、改選に伴う委員交代がなされ、新メンバーで開催される第1回目の委員会となった。

・田嶋尚子前委員長に代わる委員長の互選の結果、谷澤幸生委員を委員長とすることを満場一致で決定し、同委員がこれを承諾した。

・Online名簿の運用に伴う、会員専用ページを

供用開始	メニュー項目
H24.11.1	オンライン名簿の検索・閲覧/公開項目の設定
	会員登録内容の確認/変更手続き
	メールアドレス変更/パスワード変更
	医師賠償責任保険団体割引加入
	会員へのお知らせメールの配信管理 (一括/階層別)
	会員向けメールマガジン配信設定
	年会費入金状況照会
	専門医単位取得状況照会
H24.11.13	学会イベント登録状況照会
H24.12.11	パブリックコメント投稿
H25.3.29	総会・学術評議員会・出欠委任状
H25.3.18	年会費クレジット決済
H25.6.1 (予定)	役職就任状況照会
H25 以降	eラーニング
	学会役員ページ
	投稿・査読システム
	専門医更新申請

□ : 今後検討, 供用開始予定メニュー

構築するにあたっての、セキュリティや、公開するメニュー内容についての意見交換を行った

- ・日本糖尿病学会ホームページ (以下, HP) は 2012 年 10 月 1 日にリニューアル版を公開した。
- ・HP のリニューアルに続けて, 2012 年 11 月 1 日に会員専用ページ「My Page」新設, 供用開始した。
- ・「My Page」内, 各種メニューについて上記表の通り供用を開始した。
- ・学会誌「糖尿病」のオンラインジャーナルは, 平成 24 年 10 月現在, 55 巻 8 号までが掲載されている。また, 第 47 巻 (平成 16 年) 以前の冊子はアーカイブで一般公開されている。
- ・糖尿病の情報化については, 平成 20 年以來 3 年間にわたり, 日本医療情報学会との合同シンポジウムが開催され, インターネット委員会委員が中心となって活動してきた。平成 23 年度からは両学会による合同常置委員会を設置し, 「糖尿病の情報化に関する合同委員会 (田嶋尚子委員長: 日本糖尿病学会, 中島直樹副委員長 (日本医療情報学会))」が発足した。これにより, インターネット委員会とは独立した委員会として現在活動を継続している。

3) 糖尿病性腎症合同委員会 世話人 羽田勝計
平成 24 年度には 2 回の委員会 (第 35 回: 5 月 19 日, パシフィコ横浜, 第 36 回: 12 月 2 日, 灘尾ホール) を開催し, 下記議論を行った。

1. 糖尿病性腎症病期分類の改訂について
病期分類に関しては, 現行の病期分類が広く用いられていること, 新しい CKD 重症度分類との整合性, 等が議論されたが結論は得られず, 引き続きワーキンググループでご検討頂く事とした。
2. 日本透析医学会編「透析患者の糖尿病治療ガイドライン」について
日本透析医学会の責任の下, 「血液透析患者の糖尿病治療ガイド 2012」として発行頂く事になった。その後, 日本透析医学会雑誌 46 (3): 311-357, 2013 に掲載された。
その他, 厚労科研, DNETT-Japan などの経過が報告された。尚, 第 36 回より, 日本病態栄養学会から 3 名のオブザーバーが参加している。
- 4) 臓器移植中央調整委員会・臓器移植関連学会協議会報告

■臓器移植中央調整委員会 委員長 岩本安彦
平成 24 年度臓器移植中央調整委員会が平成 24 年 9 月 20 日並びに平成 25 年 3 月 1 日に開催され, ①平成 25 年 2 月 20 日現在の臓器移植希望者申請書類

受付は539件(うち腎臓同時移植457件、腎臓単独移植82件)、ネットワーク登録済みは434件(うち死体腎臓移植済み152件、生体腎臓移植5件、待機中死亡38件、取り消し37件)、登録中は202件(うち腎臓同時移植156件、腎臓単独移植46件)であることが報告された。②平成25年3月1日の委員会にて、腎臓移植中央調整委員会の委員長及び委員交代が以下の通り承認された。新委員長：岩本安彦委員(功労学術評議員)、日本糖尿病学会からの新任委員：粟田卓也学術評議員、稲垣暢也常務理事、退任委員：金沢康徳名誉会員、谷口洋功学術評議員。③移植実施認定施設の施設更新基準案が示され、腎臓移植実務者委員会にて審議されることが報告された。④レシピエントの移植適応基準に関し、内因性のインスリン分泌の枯渇を裏付けるデータとなる血清Cペプチド濃度の測定値について地域ブロック毎に基準が異なるとの指摘があったため、過去の申請書データを調査し、検討を進めることとした。

■臓器移植関連学会協議会

日本糖尿病学会 世話人 岩本安彦

平成24年度臓器移植関連学会協議会は、第17回が平成24年6月30日に、第18回が平成25年3月9日に開催され、日本移植学会理事長、日本救急医療財団理事長、日本臓器移植ネットワーク専務理事、厚労省臓器移植対策室長をはじめ、関連学会代表約40名が参加した。

第17回協議会では、腎臓移植関連の議題として、「レシピエント選択基準の改定」があり、腎臓単独移植待機患者と腎臓単独移植待機患者が臓器配分を適切に行うことができるよう、腎臓単独移植でレシピエントの都合で移植を断念した場合には、さらに腎臓単独移植の候補者を選定し、腎臓は2つとも腎臓単独移植の候補者に移植するという案を提出し、承認されたことが報告された。

第18回協議会では、「円滑な脳死下臓器提供に向けてのワーキンググループ」からの提言」および「通常の医療行為としての脳死判定に関わる診療報酬についてのワーキンググループ」からの報告」があった。また、臓器移植ネットワークからは、臓器提供数の推移や脳死下臓器提供の所要時間、臓器移植希望登録者数等について報告がなされた。

5) 糖尿病学用語集編集委員会 委員長 石塚達夫

2011年4月によりやく第3版の発行に至った。

2007年5月から引き継ぎ、用語集改訂に9名の委員とともに、3年11ヶ月を経て発行することができた。英和編7,019語、和英編6,929語、略語編975語、解説を付した用語809語と第2

版にくらべてすべて充実する事が出来た。今後とも利用者各位からのご意見を多く戴き、第4版の作成に向けての準備が必要である。

6) 専門医取得のための研修ガイドブック作成委員会 委員長 中村二郎

「改訂第6版」(全面改訂)の項目立てとなる「糖尿病専門医研修カリキュラムチェックリスト」(改訂版)(本委員会委員からの修正点を含む)および「糖尿病専門医研修カリキュラム」がほぼ完成したことを受けて、4月28日に委員会が開催された。委員が分担して執筆者を推薦し、2014年春の刊行を目指して作業を進める予定である。

7) 学術調査研究等倫理審査委員会

委員長 谷澤幸生

日本人1型糖尿病の成因、診断、病態、治療に関する調査研究委員会から「1型糖尿病関連遺伝子群の多施設共同研究」、「劇症1型糖尿病症例における腹部MRIの疫学調査」に関して、前身の1型糖尿病に関する調査研究委員会から引き継ぐ研究として研究分担者の変更と期間延長の申請があり、承認した。

また、同委員会から倫理審査申請された、「劇症1型糖尿病における感染因子の検討」に対して審議を行い、一部修正の後、承認した。

8) 科学的根拠に基づく糖尿病診療ガイドライン策定委員会 委員長 羽田勝計

「科学的根拠に基づく糖尿病診療ガイドライン2013」は、2013年5月の第56回年次学術集会での刊行を予定しており、現在校正中である。今回は、編集段階で、学会ホームページを通じ、名誉会員・学術評議員の先生方から多くのコメントを頂戴した。血糖コントロール目標値を変更したこと、などが大きな特徴である。なお、出版後一定期間において学会ホームページにて公開することとしており、その方法について検討している。英語版の編集も、田嶋尚子委員長の下、順調に進んでいる。尚、両者とも刊行後、AGREE IIに基づく評価を受ける予定にしている。

9) 英語版「科学的根拠に基づく糖尿病診療ガイドライン」編集委員会 委員長 田嶋尚子

・平成24年5月18日に準備委員会を開催したのち、「科学的根拠に基づく糖尿病診療ガイドライン2013年度版」の進行に合わせて平成24年10月23日および平成25年3月29日に編集委員会を開催した。本書発行の主旨と作成に至るまでの経緯について共通の認識を

もった上で、全体の構成、章立てと構成、各章の分量と検討したうえで、各編集委員が担当する章を決定した。

- ・英語はオリジナル版の全訳ではなくダイジェスト版とし、Web 上で公開するが、冊子も作成することとした。
- ・具体的には、①ステートメントはそのまま全訳するが、必要に応じて図表も含めて解説の部分から引用追加する、②ステートメントで引用された文献のみを掲載する、③アブストラクトテーブルは日本発の論文のみとする、編集委員は担当章について和文で原稿を作成し、業者によって翻訳された成果物の英文が妥当かどうかについても責任を持つこととした。現在、翻訳業者に提出する原稿の最終チェックの段階であり、平成 25 年度上半期に web 上で公開することを目標に作業を継続している。

- 10) 将来計画委員会 (第 2 次) 委員長 荒木栄一
第 1 次委員会は、若手研究奨励賞の創設や、年次学術集会運営委員会の設置などいくつかの提言を実現させ、平成 24 年 4 月 19 日に開催された第 10 回将来計画委員会で総括を行い終了した。

本委員会は、平成 25 年 2 月 15 日に第 1 回委員会を四日市都ホテルで開催し、前委員会同様に「日本糖尿病学会アクションプラン (DREAMS)」の実現に向けて活動することを確認した。

当面の課題として、前委員会の提言で具現化されていない、優秀論文賞の創設を含め検討する予定である。

- 11) パブリックリレーションズ委員会

委員長 加来浩平
委員：渥美義仁、植木浩二郎、小田原雅人、春日雅人、寺内康夫、戸辺一之、濱野久美子、松田昌文、吉岡成人 (50 音順)

平成 24 年 7 月 15 日に委員会を開催した。糖尿病患者、特に無自覚性低血糖症を示す者の自動車運転について学会としての対応が議論され、本件に関する定期的検証を行うためのワーキンググループを作り然るべき対応体制を整備すること、また、糖尿病治療ガイド次期改訂分で本件に関する記載を盛り込むよう要請することなどを決定した。

世界糖尿病デーにおけるブルーライトアップ事業も 5 年を経過したことから、日本糖尿病学会の PR の次段階として、全国的な患者向けの

プロジェクトの開催を本委員会から世界糖尿病デー実行委員会に提案とする事を決定した。

- 12) 利益相反委員会 委員長 加来浩平
委員：岩本安彦、岩崎直子、梅田文夫、小泉順二、寺内康夫、前川 聡、山根公則、植木浩二郎、山田雅康 (顧問弁護士)

平成 24 年 4 月 8 日に委員会を開催し、日本内科学会による利益相反に関する共通指針の改訂に伴い、社団法人日本糖尿病学会「利益相反 (COI) に関する指針」(Policy of Conflict of Interest in Japan Diabetes Society) および同指針の細則を見直し、一部修正を加えた。英文誌「Diabetology International」編集委員会により策定された、同誌投稿者の利益相反自己申告書 (COI Self-Report Form) を承認した。これらは、平成 24 年 5 月 16 日開催の定例理事会において承認を得た。

平成 24 年 7 月 29 日に委員会を開催し、年次学術集会・地方会・糖尿病学の進歩他での COI 開示、糖尿病学会役員・委員会委員等の COI 自己申告について議論し、学会開示スライドひな形、役員・委員会委員 COI 申告書の様式を確定した。その後、平成 24 年 12 月 9 日に開催された定例理事会において、学会・各支部主催の学術集会における筆頭発表者 COI 開示を平成 25 年度から義務化することが決定された。

- 13) 定款・細則検討委員会 委員長 加来浩平
委員：河盛隆造、羽田勝計、富永真琴、岩本安彦、寺内康夫、中村二郎、井口登與志、植木浩二郎 (事務局：山田雅康弁護士、久保まゆみ会計士)

定款細則検討委員会は、今年度の委員会開催はありません。

- 14) 糖尿病医療の情報化に関する合同委員会

委員長 田嶋尚子
・本委員会は平成 23 年 8 月、IT の活用による糖尿病診療・研究・教育の向上のため、日本医療情報学会との合同委員会として発足した。

・平成 24 年度は、7 月 9 日、11 月 15 日、12 月 17 日に合同委員会を、12 月 9 日に糖尿病記録に関する作業 WG を開催し、初年度の活動を継続した。第 55 回日本糖尿病学会年次学術集会 (横浜、5 月 17-19 日) では「糖尿病診療の情報化に関するわが国の現況」および第 32 回医療情報学連合大会 (新潟、11 月 15-17 日) では「糖尿病医療の情報化に関する合同委員会活動報告」のテーマで合同シンポジウムを開催した。内閣官房による医療情報化タスク

フォース報告書では、本委員会が策定した「糖尿病ミニマム項目」および本委員会が協力した「どこでも MY 病院糖尿病記録」が引用された。

URL : http://www.kantei.go.jp/jp/singi/it2/iryoujyouhou/pdf/201206_houkokusho.pdf

- ・慢性疾患は複数の疾患を同時に罹患することも多いことなどから「どこでも MY 病院」構想を他疾患にも拡張していきたい、との内閣官房の要請を受け、日本高血圧学会（高血圧症）、日本腎臓学会（CKD）、日本動脈硬化学会（脂質異常症）に対して疾患ごとのミニマム項目策定の意義をお伝えした。また、ミニマム項目を踏まえた「どこでも MY 病院疾患別記録」の策定を勧めた。3学会から示された暫定案を糖尿病ミニマム項目セットと整合性があるものとするために、中島直樹委員、野田光彦委員が中心となって3学会と意見交換し調整した。疾患毎のミニマム項目セットの整備がほぼ完遂している。

15) 女性糖尿病医を promote する委員会

委員長 田嶋尚子

- ・医学生や研修医のみならず、糖尿病学や糖尿病診療に携わる女性医師のキャリア形成（家庭も含めて）を支援するための方策を提言することを目的として、平成24年度に新たに設置された委員会である。
- ・平成25年1月、糖尿病学会評議員を対象に、糖尿病学会のホームページ上でパブリックオピニオンを募集した。約100名からご意見をいただいたので、指摘された問題点別に分類し、各委員が課題を抽出した。
- ・平成25年3月に委員会を開催し、事前に配布した世界各国の男女参画に関する資料、国連ウィメンの活動、パブリックオピニオン等を参考に、ブレインストーミングを行った。現状における女性座長の割合を調査したところ、年次学術集会（第52～56回）は4.4～8.9%、平成23年、平成24年における各支部の平均は、それぞれ7.8%および6.2%であり、いずれも10%以下に止まっていた。さらに討論を重ね、平成25年度上半期には提言をまとめる予定である。

16) WHO ICD-11 内科分野内分泌作業部会

委員長 田嶋尚子

(WHO ICD-11 内科 TAG 内分泌 Working Group)

- ・2012年（平成24年）度は、第1回国内委員

会（2013年1月18日）および第5回 Face-to-Face Meeting of the Internal Medicine TAG, WHO for ICD Revision（2013年2月6、7日、国連大学5階会議室）が開催された。

- ・ICD-11へ向けたWHOの取り組みは、2007年4月のWHO改訂運営会議（Revision Steering Group: RSG）開催から5年余が経過した。RSGは①改訂プロセスの監督、分野別専門部会間の連携の調整・助言、②ICDの用途とユーザーのニーズの検討、③分類法、及びオントロジーに関する基本原則、④ICD-10（1990年）からICD-11（2014年）への移行のための計画・ツールの立案と開発、等を行ってきた。RSGには15の分野別専門部会（Topical Advisory Group: TAG）がおかれているが、内科TAG（菅野健太郎議長：自治医科大学）からの依頼により、2011年から日本糖尿病学会が内分泌作業部会（Working Group: WG）担当分野のうちの糖尿病・代謝疾患を受け持つこととなり、2011年度に疾病のヒエラルキー（病名分類階層）を作成した。
- ・2012年2月、日本内分泌学会と日本糖尿病学会はWHO ICD11の改訂作業について、予算措置も含めて支援することで合意し、内分泌WGのManaging Editorとして脇嘉代（東大）およびManaging Editor補佐として分類学に詳しい篠原恵美子（東大）を雇用した。内分泌疾患関連のヒエラルキー策定のために、内分泌学、糖尿病学、小児科学を専門とする委員18名からなる国内委員会を設置した。（次頁一覧）
- ・内分泌 Working Groupの担当分野は、WHO ICD-10 Chapter 4: Endocrinology, nutritional and metabolic diseaseのうち、E10-14, E15-16 (Diabetes, and Other disorders), E40-46, E50-64 (Nutrition), E65-68 (Obesity and other hyperalimentation), E70-90 (Disorders of amino-acid or proteins metabolism)であり、その後、E40-46, E50-64については新たにWGが設置され、内分泌WGの担当から外れた。E70-90は一部を除きassigned TAGが小児科TAGに移行するが、内分泌WGは作業の大半を終えているので、このまま協力することとした。
- ・2013年3月末日までに、新たなヒエラルキー（β版）の作成および各項目200-300字からなる定義の記載がほぼ終了し、WHOによるiCATへの入力が行われた。今後、一般公開

WHO ICD-11 内科 TAG 内分泌 Working Group 国内委員会

	氏名	役職	所属
ICD 専門員	肥塚 直美	教授	東京女子医科大学 内科学 (第二) 講座
ICD 国際 WG 協力員	島津 章	所長	京都医療センター 臨床研究センター
	田嶋 尚子*	名誉教授	東京慈恵会医科大学 (糖尿病・代謝・内分泌内科)
WHO ICD-11 内科 TAG 国内委員会委員	赤水 尚史	教授	和歌山県立医大 内科学第一講座
	岩崎 泰正	所長・教授	高知大学 臨床医学部門保健管理センター
	衛藤 義勝	教授	東京慈恵会医科大学 遺伝病研究講座
	笹野 公伸	教授	東北大学大学院医学系研究科 病理診断学分野
	竹内 靖博	部長	虎の門病院 内分泌代謝科
	竹田 秀	特任准教授	慶應義塾大学 医学部 腎臓内分泌代謝内科
	東條 克能	教授	東京慈恵会医科大学 糖尿病・代謝・内分泌内科
	長谷川奉延	助教授	慶應義塾大学 医学部 小児科
	平野 勉	助教授	昭和大学 医学部 糖尿病・代謝・内分泌内科
	福本 誠二	講師	東京大学 医学部附属病院 腎臓・内分泌内科
	堀江 重郎	教授	帝京大学 医学部 泌尿器科
	峯岸 敬	教授	群馬大学 大学院医学系研究科 器官代謝制御学講座 産科婦人科
	安田 和基	部長	国立国際医療研究センター研究所 代謝疾患研究部
	柳瀬 敏彦	教授	福岡大学 医学部 内分泌・糖尿病内科
	山田 正信	講師	群馬大学 医学部 病態制御内科
横手幸太郎	教授	千葉大学大学院医学研究院 細胞治療学	
Managing Editor (ME)	脇 嘉代	特任助教	東京大学大学院医学研究科 健康空間情報学講座
ME 補佐	篠原恵美子	特任助教	東京大学医学部附属病院 企画情報運営部
厚生労働省査読者 (正)	置村 康彦	教授	神戸女子大学 家政学部
厚生労働省査読者 (副)	方波見卓行	准教授	聖マリアンナ医科大学横浜市西部病院 代謝・内分泌・内科
	富士百合子		一般社団法人日本内分泌学会事務局

50 音順 (敬称略) *委員長

されパブリックコメントを受ける予定である。内分泌 WG 国際委員とも情報を共有し、2015 年までに β 版の完成を目指すことになる。また、WHO の依頼により厚労省を通して、PM Stewart, MD (UK), John P. Bilezikian, M.D (USA), Biverly MK Biller, MD (USA), Edwin Gale, MB, BCir (Cantab), FRCP (UK), Ulf Smith, MD, PhD (Sweden), Dorothy J. Becker, MBBCh (USA) を査読者として紹介した。

- 17) 食事療法に関する委員会 委員長 宇都宮一典
 食事療法は 2 型糖尿病治療の根幹をなすが、炭水化物制限食の是非のみならず、日本人の栄養摂取状況や糖尿病の病態の変化に対応するた

めに、多くの課題がある。そこで、現時点で是正すべき点や今後対処すべき問題を検討し、学会に提言することを目的に、平成 24 年 6 月、本委員会が発足した。活動期間は 1 年間を目安に提言をまとめ、学会が著作権を有する出版物の統一化を図ること、ならびに今後の学術的調査の必要性なども検討することとした。

第 1 回の委員会を 8 月 28 日に開催し、意見交換を行い、極端な炭水化物制限の効果に関する高い社会的関心に対して、現在までの科学的根拠に基づき、学会として見識を明らかにすることが求められており、一方で、日本人の糖尿病の病態に相応しい食事療法について解決すべき課題があり、新たな指針を示す必要があること

を確認し、提言「糖尿病における食事療法の現状と課題」の作成作業を開始した。その後、100編以上に及ぶ、国際誌に掲載された食事療法に関する論文ならびに諸外国のガイドラインを精査した。そして、我が国における栄養摂取状況の現状、糖尿病における食事療法の意義、糖尿病における炭水化物制限の意義と課題などの観点からこれをまとめ、糖尿病における炭水化物摂取、栄養摂取比率について提言案を策定した。これを、12月9日の定例理事会に提出し、審議に付して承認をえた。

平成25年1月、学会評議員を対象として学会ホームページに公開し、パブリックコメントを求めた。これをもとに修正を加え、2月14日の臨時理事会に提出した。審議の結果、さらに若干の修正を行い、理事全員の承認をえて、提言の成案に至った。3月17日、東京、一ツ橋講堂にて、学会主催「食事療法に関するシンポジウム」が開催され、関連学会代表の参加のもとに本提言を発表、意見交換を行った。3月18日、学会ホームページに全文を公開し、糖尿病第56巻3号にも掲載した。

18) 糖尿病と癌に関する合同委員会

委員長 春日雅人

委員：植木浩二郎、田嶋尚子、野田光彦、大橋健、執筆協力：後藤 温、能登 洋、小川 渉

平成24年度は委員会が4回（平成24年4月18日、8月1日、12月18日、平成25年3月26日）、会合が1回（平成25年1月17日）開催された。3月26日の第5回の委員会にて最終の委員会報告書案が提示され、若干の修正を加え、報告書最終版として公表することとなった。公表方法については、(1) 5月14日のプレスリリース、(2) 6月下旬から7月初旬の両学会の学会誌への掲載、(3) 両学会の学術集会にてシンポジウム実施（本学会5月熊本、日本癌学会10月横浜）、(4) 両学会のホームページへの掲載を予定している。

19) 糖尿病学会と肝臓学会との合同委員会

代表 春日雅人

委員：荒木栄一、島野 仁、井上 啓、綿田裕孝、窪田直人

平成24年8月1日に日本肝臓学会より研究会「肝臓と糖尿病・代謝研究会（仮称）」共同開催の提案を受け、8月17日に提案に賛成の旨を回答し、また、両学会で合同委員会を設置することを提案した。研究会の運営形式に関し、日本

肝臓学会と協議中である。具体的内容については、平成25年4月13日に本学会側委員による第1回の会合を予定している。

3. 「糖尿病学の進歩」開催について

第49回「糖尿病学の進歩」

会 期 平成27年2月20日（金）・21日（土）
（予定）

会 場 岡山コンベンションセンター、ほか（予定）

世話人 槇野博史（岡山大学大学院医歯薬学総合研究科）

※第50回「糖尿病学の進歩」の開催支部が関東甲信越支部に決定した。

4. 平成24年度収支決算に関する件

定時社員総会で審議の上、平成24年度収支決算書が承認可決された。（本号 p489～p514）。

5. 平成26年度事業計画に関する件

定時社員総会で審議の上、平成26年度事業計画が承認可決された。（本号 p515～p516）。

6. 名誉会員の推薦に関する件

今回は理事会からの推薦者がいないことが定時社員総会において承認された。

7. 次々会長（第59回学術集会）の選任に関する件

学術評議員会にて投票により第59回会長に稲垣暢也会員が選出され、定時社員総会において承認された。

8. 第57回年次学術集会に関する件

平成26年5月22・23・24日の3日間、大阪国際会議場ほか（大阪市）において開催の予定である。

9. 各種委員会委員の交代に関する件

任期満了に伴い各委員会の委員が交代することとなった。

1. 「糖尿病」編集委員会

北海道支部	吉岡 成人	NTT 東日本札幌病院
東北	石垣 泰	東北大学病院
関東甲信越	江藤 一弘 藤谷与士夫 中神 朋子	帝京大学 順天堂大学 東京女子医科大学
中部	戸邊 一之	富山大学

近畿	宮田 哲 大阪厚生年金病院 金藤 秀明 大阪大学大学院
中国・四国	柱本 満 川崎医科大学
九州	西尾 善彦 鹿児島大学大学院

※今回改選の委員のみ掲載

中部	笈田 耕治 福井中央クリニック
近畿	西 理宏 和歌山県立医科大学 豊田健太郎 京都大学医学部附属病院
中国・四国	四方 賢一 岡山大学病院 新医療研究開発センター
九州	宮村 信博 公立玉名中央病院

※今回改選の委員のみ掲載

2. 「食品交換表」編集委員会

東北支部	高橋 和真 岩手医科大学
関東甲信越	森 保道 虎の門病院
近畿	原島 伸一 京都大学大学院
九州	竹田 晴生 (社医) 黎明会宇城総合病院

※今回改選の委員のみ掲載

3. 「治療の手びき」編集委員会

北海道支部	関口 雅友 札幌厚生病院
東北	玉澤 直樹 弘前大学大学院
関東甲信越	犬飼 敏彦 獨協医科大学越谷病院
近畿	山崎 真裕 京都府立医科大学
九州	土井 康文 麻生飯塚病院

※今回改選の委員のみ掲載

4. 専門医認定委員会

北海道支部	黒田 義彦 滝川市立病院
東北	松井 淳 弘前大学医学部
関東甲信越	杉原 茂孝 東京女子医科大学 東医療センター 岡本真由美 駿河台日本大学病院 佐々木 敬 東京慈恵会医科大学附属病院 宮川 高一 多摩センタークリニックみらい
中部	森田 浩之 岐阜大学大学院
近畿	森 克仁 大阪市立大学大学院 今川 彰久 大阪大学大学院
中国・四国	柱本 満 川崎医科大学
九州	田尻 祐司 久留米大学医学部

※今回改選の委員のみ掲載

5. 専門医試験委員会

北海道支部	三好 秀明 北海道大学
東北	山口 宏 済生会山形済生病院
関東甲信越	佐倉 宏 東京女子医科大学 東医療センター 栗田 卓也 埼玉医科大学 阪本 要一 慈恵医大晴海トリトンクリニック

10. 「糖尿病学の進歩」プログラム委員会について

細則第 48 条④により、下記の様に決定された。

「糖尿病学の進歩」プログラム委員会

第 47 回「糖尿病学の進歩」世話人：住田 安弘

第 48 回「糖尿病学の進歩」世話人：吉岡 成人

第 56 回会長：荒木 栄一

第 57 回会長：花房 俊昭

学術調査研究・教育担当常務理事：春日 雅人

11. 学会後援について

申し込みのあった 7 件を後援することとした。

- 第 30 回糖尿病 Up・Date 賢島セミナー
平成 25 年 8 月 24 日～25 日
- 2013 年度全腎協全国大会 in みやぎ・仙台
平成 25 年 5 月 18 日～19 日
- 第 13 回日本先進糖尿病治療研究会
平成 25 年 11 月 30 日
- より良い特定検診・保健指導のためのスキルアップ講座
平成 25 年 6 月 9 日・30 日
- 第 11 回 1 型糖尿病研究会
平成 25 年 10 月 26 日～27 日
- 「メタボリックシンドローム撲滅運動キャンペーン」
平成 25 年 4 月 1 日～平成 26 年 3 月 31 日
- 第 19 回日本小児・思春期糖尿病研究会年次学術集会
平成 25 年 7 月 14 日

以上 文責 庶務担当常務理事 加来浩平